

秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

# 真澄

MASUMI  
No.36



「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

# 真澄とアイヌ

平成30年 7月14日(土)～8月26日(日)

## 1 アイヌの人々

真澄が残した北海道での日記『えみしのおえき』(寛政元年一七八九)や『えぞのてぶり』(寛政四年一七九二)などの内容を見ると、真澄は旅をする間、アイヌの人々と積極的に関わりをもとうとしていたように見受けられます。おそらくアイヌのことを深く知りたいと考えたからでしょう。真澄が北海道を旅した理由の一つが垣間見えるような気がします。真澄は、文字を持たない言語であるアイヌ語を聞き取って、日記の中にカタカナで表記したり、彼らの住む村(コタン)を訪れ、彼らの住む家(チセ)に泊めてもらったりしています。

真澄はアイヌの人々が楽器を演奏している姿も図絵に描いています。アイヌ語でムツクルと呼ばれる楽器です。アイヌの子どもたちがムツクルを演奏している様子を描いた図絵では、竹製のムツクルが使われているのが分かります。真澄は「口琵琶」と日記中に表記していますが、現在は「口琴」と和訳されます。その名の通り、口腔内の空洞を生かして、息の出し入れによって音を奏でる楽器です。

れます。中でもよく出てくるのが「アツトウシ」と呼ばれるオヒヨウやシナノキなどの樹皮で織られた衣服です。真澄が見つけていたのは、飾らない、ありのままのアイヌの人々の姿であったのかもしれませんが。

真澄が蝦夷地(現在の北海道)を訪れたのは、天明八年(二七八八)のことでした。それから四年半余りの歳月を北海道で過ごし、その間、真澄はアイヌの様子をつぶさに観察し、文章と図絵で記録に残します。初めて目にするアイヌ独自の生活や文化は、大いに真澄の興味をかき立てたことでしょう。

本展では、アイヌの生活や文化を真澄がどのように捉えたかを、「アイヌの人々」、「アイヌの暮らし」、「アイヌの信仰」と題し、三つの観点から考えてみます。



日記『えぞのてぶり』(館蔵写本)

右の図絵は日記『えぞのてぶり』に描かれたもので、アイヌの男性二人が酒を酌み交わす様子を描いています。二人のアイヌが楽しげに酒を飲む様子は、真澄の目には微笑ましく、また少し羨ましくも映ったのではないのでしょうか。

アイヌの人々は稗(ひえ)や粟(あわ)を原料とした酒を造り、儀式などの際に用いたようですが、時々はこうして宴を開いていたのかもしれませんが。



日記『えぞのてぶり』(館蔵写本)

また、真澄の図絵に描かれているアイヌの人々が着ている衣服は、華美でなく、文様の刺繍も比較的少ないものです。おそらく真澄が描いた人々が着ていた衣服は盛装(正装)ではなく、普段着であったと思わ



## 2 アイヌの暮らし

アイヌの人々は日常、何を食べ、どのように生計を立てていたのでしょうか。真澄の興味を大いにかき立てる疑問であったことでしょう。真澄はアイヌの生活に密着し、その様子を事細かに記録しています。

### 狩猟

アイヌは自らの食料や生活の物資を獲るため、または交易品となる毛皮などを獲るために狩猟を行っていました。対象となる動物はエゾシカ、ヒグマなどの大型のものから、キタキツネやエゾリスなどの小型のものまで、幅広いものでした。

また、アイヌが狩猟に使用する道具は主に弓(ク)と矢(アイ)でした。また「ア

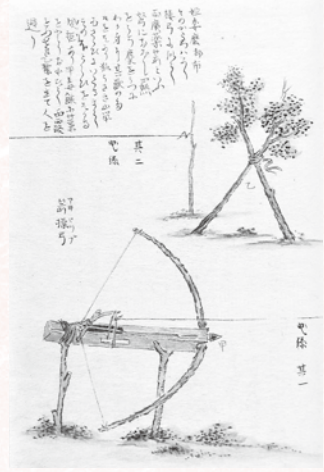


鞆皮衣(アツトウシ) 館蔵



片口(エトウヌブ) 館蔵

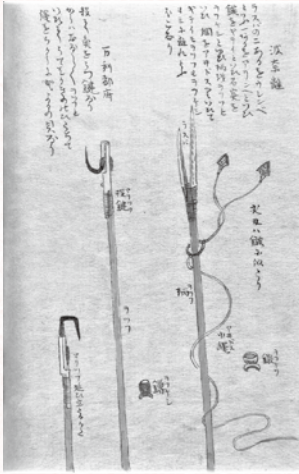
マツボ」という仕掛け弓を用いることもあり  
ました。真澄はこの仕掛け弓について、日  
記に詳しく記録しています。



日記「えぞのてぶり」(館蔵写本)

### 漁労

真澄は、アイヌの人々が漁をしている様  
子も図絵に描いています。「キテ」と呼ばれ  
る銚先をつけた漁具を用いています。銚が  
獲物に刺さると、綱でつながれた銚先が柄  
から離れ、獲物が動いても銚先が刺さった  
ままになる仕組みになっています。真澄  
は、この漁具についても図解して詳しく説  
明しています。物の用途や形状について詳  
細に記録する、真澄の本領発揮といったと  
ころでしょうか。



日記「えぞのてぶり」(館蔵写本)

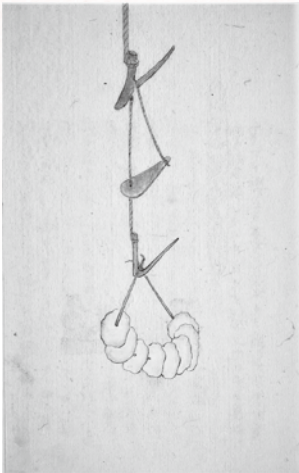
### 採集

アイヌの人々にとって狩猟や漁労は男性  
の仕事で、採集は女性の仕事でした。女性  
たちは、サラニブと呼ばれる編み袋を背  
負って野山を巡り、オオウバユリやウドな  
どの山菜や、ヤマブドウなどの木の实を  
採っていました。

また、常に食べるものが確保されている  
わけではなかったアイヌの人々の、生活の  
知恵が感じられるものとして、「トウレブ  
アカム」があります。これはオオウバユリ  
をつぶし、丸めて形を整え、さらに真ん中  
に穴を空けて、ひもを通して吊して乾燥さ  
せた、いわゆる「保存食」のことです。真澄  
はこの保存食も図絵に描いています。



編み袋(サラニブ) 館蔵



日記「えみしのさえき」(館蔵写本)

## 3 アイヌの信仰

アイヌの人々は、この世のあらゆるもの  
に靈魂が宿ると考え、その中でも特に、人  
間の役に立つものや、人間の力ではどうに  
もできないものは「カムイ」(神)である  
として崇めました。カムイを崇めることに  
よって、アイヌの人々はカムイに守られ、  
恩恵を受けることができる信じました。  
その最たるものが自然の恵みです。自然の  
中で、自然と共に生きるアイヌの人々に  
とって、信仰は非常に重要な位置を占める  
ものでした。

真澄もまた、アイヌの信仰に大きな関心  
を示し、いくつか信仰に関わる事柄につい  
ても記録しています。



木弊(イナウ) 館蔵

アイヌの信仰を語る上で欠かすことので  
きないものが、「イナウ」と呼ばれる木幣で  
す。イナウの役割は様々で、カムイがこの  
世に現れる際の依代(よりしろ)であったり、カムイが  
神の国に帰る時に最も喜ぶ土産物であつた  
りするとされています。また、人間の言葉  
を神々に伝える役割も果たします。

真澄の図絵にも集落内に置かれた祭具の  
一部として、熊の頭骨と共にイナウが祀ら  
れた様子が描かれています。ヤナギやミズ

キなどの木の枝の周りを削っていき、割り  
先を燃したり、束ねたりといういろいろな形状  
にします。

また、真澄はアイヌの人々にとって大き  
な意味をもつ霊送り(イヨマンテ)の儀式  
に関連する内容も日記に記録しています。

ある日、アイヌの集落を訪れた真澄は、  
そこで檻の中に入れられた子グマを目にし  
ます。それはいずれイヨマンテの儀式に  
よって、神の国に送られる子グマでした。  
子グマは人間界へ遊びに来てくれた神(カ  
ムイ)であるとして、集落の人々に大切に  
扱われます。そして、いよいよイヨマンテ  
が行われる時には、人々は盛装し、華やか  
な装飾を施した用具を用いて、子グマを  
賑々しく神の国へ送り出します。盛大に神  
の国に送ることによって、再び動物の姿を  
借りて人間界を訪れてくれる神が現れるこ  
とをアイヌの人々は願っているのです。



日記「えぞのてぶり」(館蔵写本)



## 1 一枚の写真



当館・内田文庫には、ノートに貼られた一枚の写真があります。無罪ノートの下部に書かれた「菅江真澄全集刊行 編集委員の顔合せ」などの文字は、内田武志によるものです。写真に写った人物の名前とともに、自身を「内田武志」、妹を「内田八子」と客観的に書いているのは、これから大きな事業に携わるといふ誇りとその決意を示しているかのようです。

病臥の内田武志を囲んで（右から）

小箕俊介（未来社編集担当）  
西谷社長（能雄、未来社社長）

内田八子（妹、秋田大学教育学部助教授）  
奈良環之助（秋田県文化財保護協会会長）

宮本常一（民俗学者、武蔵野美術大学教授）  
※『宮本常一日記』（毎日新聞社）と西谷能雄「思うこと」（『未来』No.30）の記述などから、写真に内田武志が添えた「昭和四十三年十二月二十三日」の日付は間違いで、実際は二十一日であったと考えられる。

## 2 全集刊行の経過

未来社から出版された『菅江真澄全集』（以下、全集とする）は、合わせて十三冊の刊行に、最初の編集会議から数えて実に十三年もの月日を費やすことになりました。

全集各巻の巻末には、全集の全体像に加えて、既刊と次回配本予定を示すのが一般的です。巻末にある出版告知を拾い出してみると、全集の出版が、必ずしも順調に推移したわけではないことがわかります。

菅江真澄に関する既刊本が翻刻のベースになっていいるとは言え、それまで発見されていた真澄の資料すべてを網羅しようとしたため、それだけ難事業になりました。

全集編纂の主な作業は、校合（きょうごう刷り上がった活字と原本とを照合すること）、それに、註と解題の執筆でした。それを、秋田の内田武志、東京の宮本常一が分担しておこないましたが、実際は内田による作業と執筆が多いため、内田が主導することになりました。執筆の分量や、別巻一が内田武志による「菅江真澄研究」と銘打たれたことから、全集が内田武志個人による編纂と見做されているといっても過言ではありません。

それは、原本や遺墨資料のほとんどが秋田にあったことに加えて、解題執筆を内田武志が分担したことからの自然の成り行きだったのかもしれませんが。

全集の中で、はじめから難題となっていた雑纂編（合わせて二巻）の刊行を待つことなく、内田武志は亡くなってしまいました。内田にとって、全集の編纂は、まさしく真澄研究の集大成になりました。

## 刊行にまつわる事柄

■全集の全体像に不確定要素をかかえたまま、刊行が始められた。その第一の要因は、雑纂編に入る資料の調査と分量が決まらないことにあった。最終的に雑纂編に入った資料を、当初は随筆編に入れる計画もあった。

■秋田の民俗学者・奈良環之助が編纂者に加わる予定であったが、刊行開始前の昭和四十五年十一月に亡くなった。

■資料調査を目的に、内田武志は菅江真澄研究所の活動を活性化させた。

■全集は、現在も形としては未完の状態が続いている。それは、別巻二の索引編が、未だ刊行されていないからである。

■雑纂編を除き、既刊本が原稿となった。

■日記 ↑秋田叢書別集「菅江真澄集」

■地誌、勝地臨毫 ↑秋田叢書

■随筆 ↑菅江真澄未刊文献集一

■図絵集 ↑菅江真澄未刊文献集一、二  
雑纂編は、そのほとんどが初めての翻刻となった。

## 3 宮本常一記念館の資料から

宮本常一（二九〇七〜八二）の生まれ故郷は周防大島（山口県）で、島の東側にある旧東和町に宮本常一記念館があります。そこには、宮本常一関係資料や蔵書が収まり、宮本常一が収集した民俗資料を紹介する常設展示室もあります。

宮本常一と内田武志は、戦前、渋沢敬三が主宰したアチック・ミュージアムでともに学んだ旧知の仲でした。そのこともあり、宮本常一記念館には、内田武志と宮本常一の関係を示す資料が保管されています。全集関連では、二人の具体的な遣り取り

菅江真澄に関する学習は、『菅江真澄遊覧記』（平凡社東洋文庫、全5巻）と『菅江真澄全集』（未来社、全12巻・別巻1）を基本テキストにおこなわれています。前者は親しみやすい現代語訳としてよく読まれ、後者は真澄の著作を網羅したものとして真澄の学習には欠かせません。どちらの出版も民俗学者の宮本常一と、秋田に住んで真澄研究を続けた内田武志が編纂者として名を連ねています。特に『菅江真澄全集』は、刊行を終えてから37年経った現在でも真澄研究の根幹であり、そこで打ち立てられた内田武志の論は真澄研究の指針にもなっています。

本展では、『菅江真澄全集』の出版にかかわる事柄について、編纂者である内田武志の資料（館蔵）と宮本常一の資料（山口県周防大島町・宮本常一記念館蔵）から探ってみてみたいと思います。

展示協力：宮本常一記念館

## 『菅江真澄全集』(未来社)刊行の経緯

刊行順	全集巻数・内容	刊行年月日	間隔	巻末告知 <sup>※</sup> から
①	第一巻 (日記—信濃・出羽陸奥)	昭和46年3月25日 (1971年)	8カ月	註についての考えの違いを発端にして、内田と宮本との全集編纂についての考えの違いが明確となる。(昭和46年8月25日付宮本宛書館から)
②	第二巻 (日記—蝦夷地・下北)	11月30日	8カ月	
③	第三巻 (日記—津軽・秋田1)	昭和47年7月10日	7カ月	
④	第四巻 (日記—秋田2)	昭和48年2月25日	5カ月	最終型ではないが、初めて全集の全体像を明示した。雑纂編が1巻、別巻は明示されていない。
⑤	第九巻 (図絵集)	7月31日	1年2カ月	
⑥	第十巻 (隨筆)	昭和49年9月30日	1年2カ月	
⑦	第五巻 (勝地臨毫、地誌—雄勝郡)	昭和50年11月15日	11カ月	別巻一、別巻二の刊行が初めて示された。次回配本の巻数は示されず。別巻一を「評伝・資料篇」から「菅江真澄研究」にすることを告知した。
⑧	第六巻 (地誌—平鹿郡)	昭和51年10月15日	1年	
⑨	別巻一 (内田武志の菅江真澄研究)	昭和52年10月25日	7カ月	
⑩	第七巻 (地誌—仙北郡1)	昭和53年5月31日	1年2カ月	
⑪	第八巻 (地誌—仙北郡2)	昭和54年7月20日	1年5カ月	
	内田武志死去 (昭和55年12月3日)			
⑫	第十一巻 (雑纂1)	昭和55年12月20日	9カ月	雑纂編を2巻とすることで刊行の最終型が決まる。
⑬	第十二巻 (雑纂2)	昭和56年9月20日 (1981年)		
●	別巻二 (索引編)			「別巻二」索引編は未刊のまま (2018年まで37年間)

は、手紙を通しておこなわれました。ただ、出版に関することについては、未来社の編集担当である小箕俊介(のち未来社長)を介しておこなわれました。そのため、宮本常一記念館にある資料は、内田武志から小箕俊介に宛てた手紙が回送されたり、そのコピーが送られたりしたものと

なっています。全集編纂にあたってまずおこなわれたのは、菅江真澄著作の整理、及び、著作が活字本としてどこに収録されているかをまとめる作業でした。また、既刊本の活字の大きさや分量を調べて、それが全集で予定している活字や行数でどれぐらいの分量にな

るかなどを計算するなどして、全集の全体像を計画することでした。

一方で、新たに翻刻する真澄の著作や、短冊や書簡などをまとめる「雑纂編」の見通しが立たず、そのことを検討課題としたままで刊行が始められました。

全集刊行が始まってまもなく、第二巻の原稿作成にあたって、二人の間に意見の対立が起こります。そのきっかけは、宮本常一が、国文学に関する註記にあたって、武蔵野美術大学の同僚にその執筆を頼んだことにあります。宮本にすれば、専門家からの詳しい註記が必要と考えてのことでしたが、内田にしてみると、全集はよりよいテキストづくりが主眼であって、註記は短いものであつて良いとする考えでした。

そもそも宮本常一が分担した註記は、日記編だけに入れられたものです。その註記に関して、第一巻(第一回配本)の凡例、第二巻(第二回配本)の巻末に名前が出てきただけで、あとは取り立てて名前が出てきていない事実があります。分担の割合と内容から見ても、この後、全集の編纂が内田武志に大きく傾斜していったと言えます。

### 4 菅江真澄研究所の活動

全集刊行に向けた最初の編集会議の翌年である昭和四十四年(一九六九)、内田武志が主宰する菅江真澄研究所が中心となつて、真澄の没後百四十年記念祭が執り行われました。これは、前年に刊行を終えた平凡社東洋文庫の出版の影響もあり、大きな催しとなりました。それ以前、内田は「菅江真澄研究所」を自宅内に設けて、調査活動を始めることになりました。昭和二十

一年の『菅江真澄遊覧記総索引 歳時編』(謄写版)の出版に際して、内田武志は菅江真澄研究会の設立を宣言していました。

「研究会」を「研究所」としたのは、秋田の地に菅江真澄の資料館を建てたいとの内田兄妹の願いからでした(宮本常一宛内田八子書簡:宮本常一記念館蔵)。菅江真澄研究所には、病臥の内田武志に代わって県内外の資料調査をおこなう支援者らも加わりました。彼らの調査は、内田による全集の執筆に生かされていくことになりました。

### 5 宮本常一と内田武志

アチック・ミューゼアムの同門であった内田と宮本常一は、渋沢敬三が昭和三十八年(一九六三)に亡くなった後、秋田と東京という距離を隔てながらも、『菅江真澄遊覧記』(全五巻)と全集(全十二巻、別巻一巻)を刊行しました。

宮本常一も真澄に対する関心は高く、日本観光文化研究所での所長講義をまとめた『菅江真澄—旅人たちの歴史2』を未来社から出版しています。

### 6 宮本常一がみた秋田

宮本常一の眼に映った当時の秋田について、宮本常一記念館が蔵する写真を紹介しました。なお、昭和三十年十一月撮影の35点は、ウェブサイトで「宮本常一データベース」で検索)でも見ることができま



# 企画展 菅江真澄、記憶のかたち～没後190年記念展～

平成30年9月22日(土)～11月4日(日)

当館では昭和五十年（一九七五）の開館以降、菅江真澄に関する企画展（特別展を含む）を何度か開催してきました。ここで言う「企画展」とは、リニューアル（平成十六年）以前の第三展示室、現在の企画展示室でおこなう大きな展示を指します。

今回の企画展は、ここ十年では、平成二十年度の企画展「あきた遺産、菅江真澄」没後一八〇年記念展」、平成二十六年年度の国民文化祭に合わせおこなった特別展「菅江真澄、旅のまなざし」に続く開催となりました。

菅江真澄資料センターでおこなう通常の展示では、真澄の著作内容を紹介することを重視する点などから、当館が所蔵する写本を中心に紹介していますが、今回の企画展は、没後一九〇年の記念展であるため、展示会場いっぱいには自筆本（重要文化財「菅江真澄遊覧記」、秋田県指定文化財「菅江真澄著作」）を展示することから、構成を決めていくことになりました。加えて、真澄の大きな特徴であり魅力にもなっている図絵を数多く見ていただきたいと考え、第一章「旅と日記」、第六章「地誌を編む」では、二週間ごとに丁替え（ページをめくること）をおこないました。

また、資料所蔵者の方々からの御協力を得て、冊子以外の掛軸・短冊・実資料などのいわゆる「遺墨資料」を展示したほか、平成二十六年の特別展以降、その存在が明らかとなったり展示可能になったりした資料を「初公開資料」として紹介しました。それらを含めた約二〇〇点の資料を展示することができました。

十年後の二〇二八年は、真澄の没後二百年になります。真澄が秋田県内外に与えた

文化的影響、それに昭和三年（一九二八）の没後百年祭が柳田国男による講演などで大きなブームを巻き起こしたことなどを考え合わせると、十年後の没後二百年では、現代に合った顕彰の仕方を含めた大きな催しになってほしいと期待します。その中で、菅江真澄資料センターが果たすべき役割も少なくないだろうと想像します。

真澄の記録が、世界記憶遺産にふさわしいと評価する研究者もいます。日本のみならず世界から注目されることで、真澄の記録にさまざまな角度からの解釈が試みられ、それを通して、秋田県のみならず記録に残った地域の方々が一私を含めて、その地域に住む意味や誇りを見出せたら、真澄を学習する意義も出てくるように思えます。

今回の企画展の構成や内容、展示手法などを今後精査しながら、十年後の没後二百年を見据えた活動を、菅江真澄資料センターとして積み重ねていきたいと考えています。

なお、今回の企画展では、展示内容を記録として残す目的から、A5判176頁の展示図録を刊行しました。菅江真澄資料センター・スタディールームの開架図書にしていますので、展示資料についての詳しい解説は図録で御覧ください。（松山）

## 展示趣旨から

わたしたちの暮らしの中には、遠い祖先から引き継いできた（記憶）―伝統があります。真澄の記録は、江戸時代後期、それを真澄のまなざしで切り取った「記憶のかたち」でもあります。その「記憶のかたち」の価値をあらためてとらえ、その土地

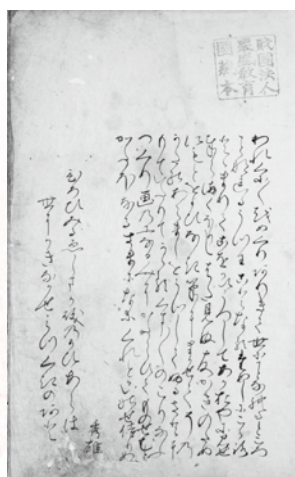
独自の伝統とともに、真澄の著作や関連する事柄を、後世によりよい形で伝えていきたいと考えます。この記念展を機会に、真澄の記録を体系的に理解していただければ幸いです。

## 第一章 旅と日記

真澄の人生を特徴づけているのは、四十七年もの間、異郷の地で過ごしたことにあります。「菅江真澄遊覧記」には、各地で見聞した珍しい習俗や文物、それに交流した人たちのことなどが記されています。各地への旅の日記を、信濃、出羽・陸奥、蝦夷地、下北、津軽、秋田に分けて紹介しました。

## 第二章 記録の視点

「菅江真澄遊覧記」の読み方や見方は、人それぞれの興味や志向の持ち方によって異なります。それに応えるだけの豊富な材料が、真澄の著作にはあります。真澄の記録を、《粉本稿》序文にある文言をよりどころにして、ところ（土地）、ためし（習俗、生業）、うつわ（道具、モノ）の三つの観点から紹介しました。



《粉本稿》（大館市立栗盛記念図書館蔵）は、真澄の初期の図絵集である。序文の二行目途中から「世にことなれるところ、ことなれるところ、ことなれるところ」とあり、つわ、ことなれるためしにころとまりて」と、記録の視点を述べている。

### 第三章 交流の譜

真澄の旅は、人々と交流を持つことが前提にあり、人々の心の温かさに支えられていました。真澄自身も、旅を語り、歌を詠い、医者としての技能を発揮しながら、人々との交流を深めました。二十八年余りを過ごした秋田県には、真澄と人々との交流を示す遺墨資料が残されています。



掛軸・短冊・棟札を展示したほか、真澄が交流した人物として、大友直枝・高階貞房・佐藤太治兵衛家を取り上げた。写真の左2点は直枝宛真澄書簡、右2点は、真澄のことが記録された大友家資料である。いずれも横手市大森町・大友克己氏蔵。

### 第四章 学びの方法

真澄の旅を支えたのは、物事に対する尽きることのない興味と、各地での見聞で培われた知識でした。さらに、秋田に入ってから、書物を自ら写したり、考証に利用したりすることが多くなりました。これらは、随筆や地誌といった後期の著作に生かされることになり、真澄の著作の幅を広げました。

### 第五章 名所を謳う

各地の歌枕を訪ねて歌を詠うことが、真澄の旅の当初からの目的でした。世間によ

く知られた名所ばかりではなく、各地にはその土地ならではの特徴を持った「名どころ」があります。長い歴史や特徴のある文化をその土地に認め、歌や図絵にして賞揚しています。

### 第六章 地誌を編む

後年、真澄は秋田領六郡の地誌に取り組みました。一村ごとにその土地の地理や歴史、文化などをきめ細かく書き記すとともに、そこに多くの彩色された図絵を添えることで、生き生きと当時のようすを描き出しています。人々に「旧跡吟味役」と認識されたように、その土地ならではのよさを探訪し、書物として残してくれました。



平鹿郡と仙北郡に著された地域を地図上に示した上で、重要文化財「菅江真澄遊覧記」の各巻を展示した。2週間ごとに丁替えをおこない、それぞれに解説を付した。壁ケースの向かいには、地誌に関わる諸資料を展示。写真の実資料は、兜の前立(美郷町・齋藤則迪氏蔵)で、仙北郡の地誌を象徴する資料として展示した。

### 初公開資料

旧佐藤太治兵衛家の板壁(木製)、藤杜神社棟札(木製)、榊葉日記(冊子)、短冊帖(菅江真澄「互恨恋」を含む)、「ひふみ川といふ処に」(軸装短冊)、待隣家花(短冊)の六点。

### 付帯展示

真澄の学習の仕方、楽しみ方は、技能や興味によって人それぞれにあるのではないのでしょうか。表現することによって、真澄の著作の読みも深まっていくはずです。趣味を生かしながら真澄を見たり読んだりしてみてもどうでしょうか。展示では、写真、ゴム版画、イラスト、紙芝居、版画、スゴロク作製を紹介しました。



会場／ふるさとまつり広場

### 関連事業

●菅江真澄没後190年記念シンポジウム  
(兼)全国菅江真澄研究会  
共催／菅江真澄研究会

日時／9月29日(土) 13:00～16:40  
会場／秋田県生涯学習センター3階講堂  
テーマ／真澄の今―ゆかりの地からの発信―  
パネルディスカッション／  
コーディネーター

石井正己(東京学芸大学教授)

塩瀬忠夫(愛知県新城市住・菅江真澄研究会理事)、中原文彦(長野県塩尻市・本

洗馬歴史の里資料館学芸員)、深澤恭仁(青森菅江真澄研究会会長)、天野荘平(男鹿市菅江真澄研究会会長)、松山修(当館主任学芸員)

●真澄講話会「はじめての真澄学」  
協力／菅江真澄研究会  
①10月5日(金)真澄の足跡をたどって  
講師／角崎大(当館学芸員、真澄担当)  
②10月19日(金)「菅江真澄の不思議」  
講師／小笹鉄文(菅江真澄研究会会長)  
③11月2日(金)  
「いづこにか旅人は行ぞ―菅江真澄の旅姿―」  
講師／永井登志樹(菅江真澄研究会副会長)  
時間／13:30～15:00  
会場／学習室  
参加／①45名 ②37名 ③55名

●ビデオ上映会「菅江真澄の旅」  
(2002年紀伊國屋書店制作)  
日時／①9月28日(金) ②10月12日(金)  
③10月26日(金)

内容／前半：10:00～12:30(真澄の生涯、青森・津軽編、岩手編、各編約45分)  
後半：13:30～16:00(北海道編、青森・下北編、秋田編、各編約45分)

●展示解説会  
解説／角崎大(当館学芸員)  
日時／①9月23日(日) ②10月14日(日)  
③10月28日(日)  
いずれも10:00～11:00

会場／企画展示室  
参加／①25名 ②16名 ③12名

大館市立栗盛記念図書館・真崎コレクション展  
平成三十年十一月十七日(土)～二十五日(日)

## 「菅江真澄と描画資料」

秋田県立博物館による出張展の一環として、標記展示をおこないました。一昨年度の「真崎文庫の中の菅江真澄とその魅力」、昨年度に続く開催となりました。今回は真澄の図絵や関連資料にある絵を「描画資料」と称してそれらに焦点を当て、真崎文庫の中から、県指定文化財「菅江真澄著作」と大館市指定文化財の一部を展示しました。

### ■県指定文化財「菅江真澄著作」中の描画資料

真澄の記録の特徴は、その緻密さにあります。見聞した事柄を説明的に記録するとともに、わかりやすく伝える図絵も描いています。図絵は見る人のイメージを膨らませ、その理解を助けてくれます。また、伝えるべきものの形や色、大きさ、周囲の状況などもわかりやすくしてくれまます。図絵があるからこそ、真澄の記録は人々を引きつけると言っても過言ではないでしょう。

本展では、県指定四十六点のうち、描画のある十六冊を紹介しました。

- ①百白之図(ももつすのかた)
- ②母模宇須乃迦多(ももつすのかた)
- ③さくらがり下
- ④房住山昔物語(ほうじゅうさんむかしものがたり)
- ⑤新古祝藝品類之図(しんこいらいびんるいのかた)
- ⑥菅江真澄翁画(すがえますみおつが)
- ⑦ひろめの具(ひろめのうつわ)



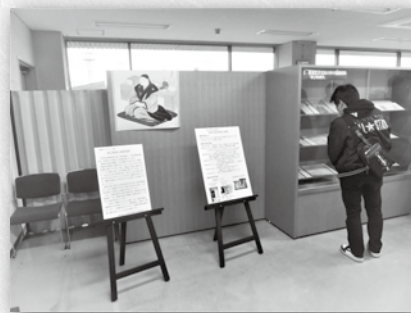
展示解説の様子

- ⑧錦木雑葉集(にしきぎざつようしゅう)
  - ⑨けふのせばのの
  - ⑩奥の冬ごもり
  - ⑪雪の山越え
  - ⑫都田野塵束(つゆのちりつか)
  - ⑬粉本稿(ふんぼんこう)
  - ⑭雪のおるちね
  - ⑮月の出羽路仙北郡強首邑(つきのでわじせんぼくぐんこわくびむら)
  - ⑯月の出羽路仙北郡上淀川邑(つきのでわじせんぼくぐんかみよどかわむら)
- ◎百白之図(ももつすのかた)  
形や使い方に特徴のある白を描いた図絵集で、ここでの「百」は「たくさん」を意味します。国立国会図書館に同名の資料があるため、「菅江真澄全集」では本資料を「異文二」としています。三十一図のうち、十七図が国会図書館本と同じですが、本資料では白唄と白にちなむ伝承が古書等から引用され、また、白を掲げたり引いたりする人物が描かれているなどの特色があります。

### ■菅江真澄関連の描画資料

大館市指定文化財の真崎文庫にも、真澄の記録に関連する資料があり、その中にも絵が含まれています。

- ①秋田十景之図
- ②駅路鈴之図
- ③温故図録(二)
- ④阿仁諸鉢山之図
- ⑤寺社木巡見為御用下筋廻在之節一覽記
- ⑥温故図録(七)



展示室の様子

### ◎秋田十景之図

真澄が描いたとされる資料に「久保田十景」があります。そこには久保田(秋田)の佳景十カ所が描かれています。真崎文庫の「秋田十景之図」は、文と歌が「久保田十景」と同一でありながら、「綾小路(古梅)」と「宝塔寺紫藤」に多少の相違があります。図絵の構図は似ているものの距離感や細部が異なっています。江戸時代後期は各地の名所を八景・十景・十二景などと賞揚することが盛んな時代でした。時代背景を念頭に置きつつ、真澄の描いた「久保田十景」をどう考えるか、この「秋田十景之図」は問題提起をしていると言えるのかもしれない。

### 編集後記(表紙解説も兼ねて)

・平成30年は真澄没後190年に当たる年であった。当館でも「菅江真澄、記憶のかたち～没後百九十年記念展」と題して企画展を行い、多くの方々に足を運んで頂いた。また併せてシンポジウムや講話会、ビデオ上映会などの様々な付帯事業も行った。こちらの方も盛況で、予想を上回るご参加を頂いた。没後190年という節目の年が、改めて真澄のことを多くの方々に知って頂く機会となったことを大変喜ばしく思う。表紙の写真は、(上)企画展入口の様子、(下左)シンポジウムの様子、(下右)講話会の様子である。協力して頂いた企画展の資料所蔵者、シンポジウムや講話会等の付帯事業を共催して頂いた菅江真澄研究会の皆様改めてお礼を申し上げたい。

5月には元号が変わる。新しい時代の幕開けを迎える節目の時、「温故知新」という言葉が私の脳裏に浮かぶ。これまでの諸先輩方の積み重ねを大切にしながら、新しい時代、新たな発見を目指していきたい。(角崎)

# 真澄

MASUMI No.36

発行日◎平成31年3月22日  
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター  
〒010-0124 秋田市金足鳩崎字後山52  
Tel.018-873-4121(代)